

2021年5月23日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書18章28～32節

説教題：十字架による解放

先日、インターネットで興味深い話を聞きました。人が1時間、怒りに怒った後、吐いた呼気を集めて、ガラスの瓶に入れて、急速に冷やすと、水滴が出て来ますが、それを蒸発させると、灰色の物質が残るそうです。怒りや、憎しみといった感情のない呼気には、何も残らないそうです。その灰色の物質を水に溶かして、実験用の小動物に注射をしたら、小動物が死んだというのです。怒り、あるいは憎しみの感情は、呼気の中にもそのような有害なものを与えるとしたら、自分の体内で、自らにも悪影響を与えているのではないのでしょうか。しかし私達は、何かかにか、怒り、憎しみのような感情を抱えながら生きているのではないのでしょうか。今日の箇所に登場するユダヤ人の中にも、その怒り、憎しみの姿を見るのです。

今日の箇所を理解するために、初めに少しこの箇所の背景をお話します。

当時、ユダヤ人の国家は、ローマ帝国の支配下に置かれ、エルサレムを中心とするユダヤ・サマリヤ地方は、ローマから送られた総督が治めていました。イエス様の十字架の時はピラトという総督でした。しかし、ローマの総督がユダヤ人社会の宗教から政治から、全てを治めることは出来ません。そこでローマ帝国は、ユダヤ人の大祭司を中心とする「議会」という自治政府を認め、内政については議会に治めさせていました。イエス様を逮捕したのは議会です。イエス逮捕後、議会は、形ばかりの裁判でイエスに死刑を言い渡しました。しかし議会には、死刑を執行する権利がありませんでした。それは、ローマ帝国が握っていたからです。ですから議会は、イエス様を死刑にするためには刑の執行を総督ピラトに依頼しなければならなかったのです。今朝の箇所は、議会の指導者達がイエス様をピラトのもとに連れて行って、「この男を死刑にしてくれ」と頼んでいる場面なのです。

ユダヤ人指導者の姿は、人間の持っている罪、特に怒り、憎しみについて教えてください。私達も、怒りや憎しみに捉えられることがあります。それは本当に苦しいことです。願わくは解放されるべきです。でも難しい。そこにイエス様の十字架があるのです。2つに分けてお話しします。

1：怒り、憎しみの問題

なぜ、議会の人々はイエスを死刑にしようとしたのでしょうか。彼らは、議会のメンバーとして特権を享受していました。彼らにとって一番恐ろしかったのは、騒ぎが起こって、ローマ帝国が彼らから自治権を取り上げることです。彼らは、自分達の立場を守ること、自分達の信仰を民に押し付けることに汲々としていました。だから騒ぎの芽になりそうな者は、皆、邪魔者でした。そんな中でイエス様は、神の愛を語り、人々を慰め、励まし、しかも安息日に病人を癒し、また死人を甦らせ…そのような活動をしておられたので、イエス様の回りには人々が集まっていました。人々の興奮もありました。しかもイエス様は、神を語りながら、神の愛から遠い指導者達を、彼らの信仰の在り方を、激しく非難されました。指導者にとってイエスは、妬みと憎しみの対象だったし、騒ぎを起こして自分達を脅かすかも知れないと邪魔で仕方がなかったのです。本気で潰したかったのです。

だから、逮捕後の議会の裁判では「イエスは自分を神の子だと言った、渎神罪だ」と、あっさ

り死刑が決まりました。イエス様が逮捕されたのは夜中でした。しかしユダヤには「生死に関わることは夜に決めてはならない」という法があったので、彼らは、夜が明けるのを待って、夜明けと共に決めたのです。死刑は決めたものの、死刑を執行する権利がありません。それで彼らは、総督ピラトの所に死刑の執行を要請に行きました。ところが、この時期は「過ぎ越しの祭り」の時期でした。祭りの時、ユダヤ人は「過ぎ越しの食事」を取りました。しかし異邦人の住居に入ると、宗教的に汚れて食事が出来ない。そこで彼らは、自分達を聖く保つためにピラトの屋敷に入らなかったのです。ピラトの方が表に出て来ました。しかしローマ帝国は、支配地域の民の信仰の問題には干渉しませんでした。「イエスは神を冒瀆しました、瀆神罪です」と言っても、ピラトにすれば、ユダヤ人が自分達で裁けば良いことでした。しかしユダヤ人にすれば、自分達で裁けば死刑にすることができません。何が何でもピラトに裁いてもらわなければなりません。だから—(「ルカ福音書」によると)—彼らは「この男はわが民衆を惑わし、皇帝に税を納めることを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました」(ルカ 23:2)と言って、イエスをローマに対する政治的な反逆者に仕立ててしまうのです。

私達は何を教えられるのでしょうか。ユダヤ人の中には2つの姿があります。1つは、正しくあろうとする姿—(宗教的な決りを守って自分を聖く保とうとする姿)—です。裁判をしないで死刑に出来ないので、形だけでも裁判をしました。判決のために、夜明けを待ちました。ピラトの屋敷には入りませんでした。それなりに正しくあろうとしたのです。しかしその一方で、裁判は初めから死刑が決まっていました。ピラトに対する告発は、ウソの告発でした。彼らは、一方で正しくあろう、聖くあろうとしながら、他方では、怒り、憎しみ、イエスを赦せない思いが心の中にあり、それに支配されているのです。彼らは極端です。しかし考えてみると、彼らの姿は、どこか私達の姿を映し出している面があるのではないのでしょうか。

初めの人アダムが、神様から「食べてはいけない」と言われた木の実を食べて罪に踏み出した時、彼はどうなったのか。「あなたが私のそばにおかれたこの女が私に木の実をくれたのです。この女が悪いのです。いや、この女を私のそばにおかれた神様、あなたが悪いのです」と言って「あの女が悪い、神様が悪い」と、いわば他に対する憎しみ、怒りを抱えながら生きるようになったのです。私達も、正しくあろう、真面目に生きよう、愛に生きようとする面がある一方、時に、怒りや憎しみに支配される時があるのではないのでしょうか。いかがでしょうか。色々な人間関係の中で傷つけられることがあります。自分に苦しみを与える人がいます。過去のことを思い出しては、腹が立つことがあります。もちろん、いつもいつも、そういう状態にいるわけではないでしょう。また「私には怒りや憎しみは全くない」と仰る方もおられると思います。しかし多くの場合、私達は「愛に生きたい、優しさに生きたい」と願っているのに、怒りや憎しみに捉われることがあるのではないのでしょうか。しかし、怒りや憎しみに支配されることは本当に苦しいことです。その束縛の中から救い出し、解放してくれる、私達は、そんな救いを必要としているのではないのでしょうか。

2：十字架による解放

しかし、怒りや憎しみの感情は湧き上がって来るものです。自分の力ではどうにもならないという気がするのです。自分の力でどうにもならなければ、外からの力によってそこから引き上げ

てもらふ以外にないのです。では、その力とは何でしょうか。それがイエスの十字架なのです。

32 節に「これは、ご自分がどのような死に方をされるかを示して話されたイエスのことばが成就するためであった」(32)とあります。結果としてイエス様は、ローマの処刑方法である十字架に架かることとなります。ユダヤ人がユダヤの法で裁けば、たとえ死刑にすることが出来たとしても、それは「石打ち」です。しかし、イエス様はかつてこう言われました。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人々を自分のもとに引き寄せる」(ヨハネ 12:31)。「私は上げられなければならない、十字架で死ななければならない」と言われました。石打ちと十字架とでは、何が違うのでしょうか。申命記に「木にかけられた死体は、神に呪われたもの…である」(申命記 21:23)とあります。十字架の死、木に架かって死ぬことは、神に呪われることを意味しました。誰のために呪われて下さったのでしょうか。私達の、いや、私のためです、あなたのためです。イエスを信じる者は、十字架の故に、神に一切を赦され、永遠の命を生きる者になっているのです。「私はイエス様の十字架で赦されて在る」、そのことを本気で信じる時、そこに神の力が働き、私達が解放されていくきっかけがあるのです。

真珠湾攻撃の爆撃隊長だった淵田美津雄という方がおられます。彼は、戦後、日本軍の戦犯を裁く裁判に証人として呼ばれていましたが、裁判に対して「勝者が敗者に対して行う復讐だ」と言って怒りと憎しみを持っていました。何とか一矢を報いてやろうという思いがあったのでしょうか、その頃、本土に帰って来た、アメリカ軍に捕らわれていた日本人捕虜に、アメリカ軍の日本人捕虜に対する取り扱いぶりを聞いて回りました。ところが、ある捕虜から次のような話を聞きます。彼のいたキャンプにいつの頃からかアメリカ人の若い女性が現れるようになって、日本軍捕虜に親切を尽くしてくれるようになったと言うのです。兵士達が聞きました。「お嬢さん、どうしてそんなに親切にしてくれるのですか」。皆があまりに問い詰めるので、彼女はやがてその理由を話しました、「私の両親が日本軍によって殺されたからです」。「日本軍に殺されたから日本軍に親切にする」というのでは話が逆です。話はこうでした。彼女の両親は宣教師でフィリピンにいました。日本軍がフィリピンを占領したので難を逃れて山中に隠れました。3年後、アメリカ軍が再上陸して来て日本軍は山中に追いつめられました。そして両親の隠れ家が発見されて、日本軍は両親を「スパイとして斬る」と言いました。両親は「私達はスパイではないが、どうしても斬るというのなら30分の猶予を下さい」といって、30分で聖書(「山上の説教」)を交互に読み、神に祈って、斬られて行きました。その次第はアメリカにいた彼女の許にも伝えられました。両親がなぜ斬られなければならないのか、彼女は日本人に対する憎しみ、怒りで胸が張り裂ける思いでした。しかし、しばらくして彼女は、両親が殺される前の30分間に何を祈ったのか、それを思い巡らしたのです。そして、それは日本人を神に執り為す祈りではなかったのか、と思ひ至るのです。そうすると、自分の憎しみは両親の祈りとは相反するのではないか、という思いになったのです。それでも悶々として過ごしていた時、1つの御言葉に出会いました。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」(1ヨハネ 3:16)。その時、彼女の気持ちは憎しみから愛へ変えられたというのです。自分も日本人に愛を示したいという思いになり、捕虜の世話をするようになったというのです。

淵田さんはその話を聞いて、心には残りましたが、よく分からなかったのです。そんな時、洪

谷の駅前でアメリカ人が配っているキリスト教のパンフレットを読みました。そのパンフレットには、日本軍の捕虜になったアメリカ軍人の手記があり「獄中で虐待されている中で『なぜ人間同士がこうも憎み合わなければならないのか、憎しみを愛に変えるというキリストの教えについて調べたいという欲求にとらわれた』」と書いてありました。それを読んで淵田さんも「聖書を読んでみよう」と思います。そして、あちこち読む中で次の言葉に出会います。「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)。キリストが自分を十字架に架けた人々、自分を槍で突き刺そうとしている人のために祈った言葉です。この言葉を読んで、例のお嬢さんの話が甦って来ました。そして淵田さんなりに彼女の両親の祈りに思い至るのです。

「神様、いま日本軍の人々が私達の首をはねようとしています、どうか、彼らをお赦しして下さい。この人達が悪いのではありません。地上に憎しみ争いが絶えないで、戦争などが起こるから、このようなこともついてくるのです」。ここに至って淵田さんは、自分の怒り、憎しみの解決、いや、全ての解決がキリストの中にあることを感じ、キリストに向かって歩き始めるのです。

イエス様は生前も「赦すこと」を説かれました。「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5:44)、『主よ…何度まで赦すべきでしょうか』…『七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います』(マタイ 18:21~22)。しかし御言葉を知っていても、なかなか踏み出せないのが私達の弱さです。しかしイエスは、最後の最後まで、憎しみではない、愛に、赦しに生きて見せて下さったのです。そこに生きるべき道があることを教えて下さったのです。そして、神に逆らっていた私達が、赦されて神の御腕の中に生きることが出来るように、十字架で死んで下さったのです。このイエス様の十字架、十字架の赦しに思いを致す時、きっと、私達の力ではない、神様が不思議なことをなさるのではないのでしょうか。神様が、私達の怒り、憎しみを取り扱って下さり、別のものに変えて下さるのではないのでしょうか。そこに望みがあります。願わくは、憎しみの生き方ではなく、愛の生き方をする者になりたいと願います。